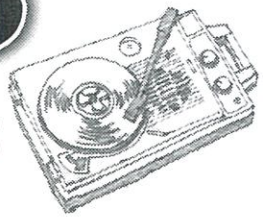
『週刊ポスト』2019.8.26(月)発売号

名曲カルテ

昭和歌謡といつまでも

第90回 阿久悠の物語を紡ぎ出した膨大な情報と言葉の〝貯蓄〟

堀井六郎
絵・松本 浦



阿久悠は作詞家としてレコード大賞を5回受賞していますが、昭和51年（1976）からは『北の宿から』『勝手にしやがれ』『UFO』の順に3年続けて受賞しています。

昭和52年のオリコンチャートによれば、6月20日付の『勝手にしやがれ』から12月5日付のピンク・レディー『ウォンテッド』まで、ほぼ半年間にわたって阿久悠作品がトップの座を独占、この事実には今さらながら驚嘆します。

この年、阿久悠40歳、作詞家として最も脂が乗っていた時期かもしれません。そしてこの超多忙時代に初めての長編小説『ゴリラの首の懸賞金』をスポーツ新聞に連載、人生の目標の一つだった作家への道に踏み出します。

この小説はスポーツ紙購読の男性読者向けにバイオレンスやセックス描写が描かれるエンターテインメントになっていますが、翌53年には『瀬戸内少年野球団』を執筆、『スター誕生！』の審査員を辞退した同56年12月以降、活字分野のほうへと次第に軸足を移していくことになります。

ちょうどその頃から書き始めた日記は70歳で亡くなる直前まで26年半もの間、1日も休むことなく続きました。

永井荷風の『断腸亭日乗』や古川ロッパの『昭和日記』などを愛読していた阿久は、この日記に自らの琴線に触れた世情の話題、情報、人物、ゴメントを書き込み、病気で苦しむようになる晩年までは感情の起伏を記さずに、創作過程の一仕事として自らに課していたものでした。

『不機嫌な作詞家　阿久悠日記を読む』の著者・三田完は「その日1日に書いたメモを並べて検討し、1ページに収まるように情報を選択する作業は、たった一人で行なう編集会議」と評しています。記録魔として甲子園で行なわれる高校野球全試合のスコアブック記載同様、その行動自体に本人の几帳面な性格と勤勉さが現われているようです。

阿久は日々こうした情報を自らの手で文字にすることで記憶に留めつつ言葉を貯蓄しておき、作詞であろうが小説であろうが、いざ物語をつむぎ出すときに、頭の中の引き出しから自由に取り出していたのでしょう。情報を収集し分析し、新たなものを提案して世に出すという手法は、20代に勤務していた広告代理店で学んだことでした。

おそらくは読まれることも予期して書かれたであろう膨大な日記は、かつて憧れの対象だったスーパーマンや月光仮面にも似た変身ヒーロー「阿久悠」のプロフィール作品であり、本名・深田公之（ひろゆき）としての実像はむしろフィクション仕立ての自伝的小説群ににじみ出ています。

ヒット曲と膨大な日記と多くの著書を比較検証することで、阿久の追い求めていた「昭和という時代に大衆が抱いていた飢餓感」が浮き彫りにされ、大ヒットメーカーの努力の一端を知ることができます。「継続は力なり」を実証して「阿久悠という作品」を完成させた無冠の人、深田公之に拍手です。

ほりい・ろくろう　昭和27年東京都生まれ。慶應義塾大学文学部卒業後は25年にわたる出版社勤務を経て独立。現在は出版社経営の他、ライターとしても活躍。『私的「昭和大衆歌謡考」』第4集『しあわせになろうね』（グスコー出版）が好評発売中